

岡田南遺跡 (第 3 次発掘調査)	
所在地	鈴鹿市岡田三丁目 210 番 1
調査目的	建売分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財の記録保存
調査期間	平成 28 年 5 月 31 日～平成 28 年 6 月 27 日
調査面積	130㎡
調査主体	鈴鹿市
調査担当	藤原秀樹・太田有香



図 1 岡田南遺跡と周辺の主な遺跡 (1/50,000)
 ※国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」を使用

1 遺跡の位置と周辺の環境

岡田南遺跡は、鈴鹿川右岸の低位段丘端部に立地します。標高はほぼ 20 m で、鈴鹿川の谷底平野からは 1.5 ～ 2 m の比高があります。段丘崖の直下には低位段丘面が東西に伸びる島状の微高地となって残っており、岡田遺跡が立地しています。

岡田南遺跡ではこれまでに 2 回調査が行われています。平成 10 年には今回の調査地の西約 200 m の地点において集合住宅建築に伴う第 1 次調査を行いました。古墳時代の土壙墓 1 基・方墳の周溝 3 基・竪穴住居 1 棟、古代の掘立柱建物 3 棟以上、中世の井戸・溝多数を検出しました。平成 21 年には、東 50 m の地点で下水道工事に伴う第 2 次調査を行いました。縄文時代のピット 1 基および弥生時代の方形周溝墓の周溝と思われる溝 4 条を検出しています。

岡田遺跡では、平成 2 年度に保育園建設のため調査が行われ、若干の柱穴・土坑のほか流路状の低地から縄文時代後期から中世にかけての幅広い年代の遺物が出土しています。特に古代の遺物には緑釉陶器などの高級な陶器や土馬などの祭祀遺物もみられました。段丘端の湧き水の水辺で何らかの祭祀行為が行われてい

た可能性があります。平成 20 年には三重県埋蔵文化財センターにより農業基盤整備事業に伴う調査が行われました。古代の土器焼成土坑が見つかったほか、古代から中世にかけての溝・土坑が検出されています。

天神遺跡も同じく低位段丘面に所在しています。古墳時代前期の竪穴住居が確認されています。

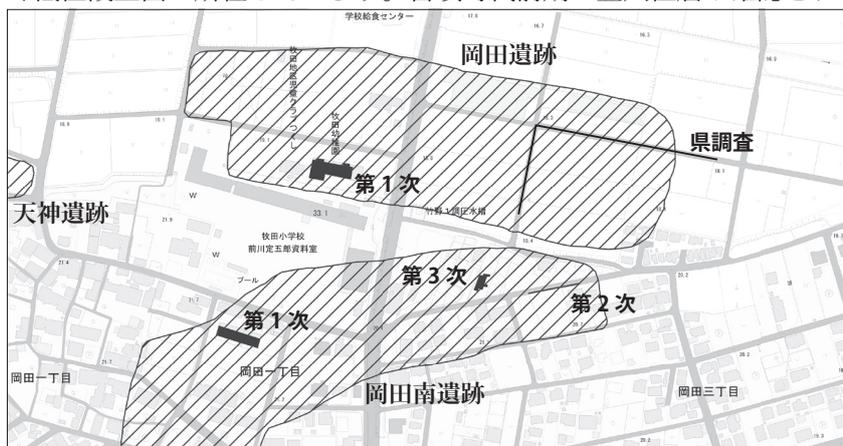


図 2 岡田南遺跡と岡田遺跡の調査 (1/5,000)

3 調査の結果

縄文時代の遺構

SK0305 南北 0.6 m × 東西 0.7 m, 検出面からの深さ 0.15 m を測る, 皿状の土坑です。底面全体に縄文土器深鉢の口縁部破片が敷き並べられています。厚手の深鉢の口縁部を大きく割ったものを, 口縁と胴部側が交互になるように貼り付け, その隙間と底面を別個体の破片で埋めています。埋土は, 黒色あるいは暗褐色のシルトです。形状から竪穴住居に伴う土器敷炉に類似しますが, 埋土に炭・焼土をまったく含んでおらず, また土器片にも被熱の痕跡は見らないことから, とりあえず土器敷き土坑としました。上面からは別の土器の脚台が正位置で出土していて, 上部は削平されて失われてしまったものとみられます。よって, この土坑は本来はさらに数 10cm の深さがあったものとみられ, 墓壇・貯蔵穴などの可能性が考えられます。土器敷に使用された土器は 2 個体で, 厚手のものは関東の加曾利 E 式・近畿の北白川 C 式の影響を受けた在地の土器で, もう 1 点は唐草文系と呼ばれる長野県の諏訪湖周辺や伊那地域に分布する土器です。これらの土器から遺構は縄文時代中期末に営まれたものであることが分かりました。

P-2 SK0305 の 1.5 m 南に位置します。南北 0.3 m × 南北 0.4 m の不整な円形のピットです。深さは 0.55 m ありました。上層からは縄文土器深鉢の胴部破片が重ねて縦に突っ込まれたような状態で出土しました。出土した土器は同様に縄文時代中期末の粗製深鉢です。

ピット p-2 以外にも, SK0305 の周囲には縄文土器片を含むピットが数基散在していますが, 竪穴住居の柱穴を想定するほどの企画性は見出せませんでした。

弥生時代の遺構

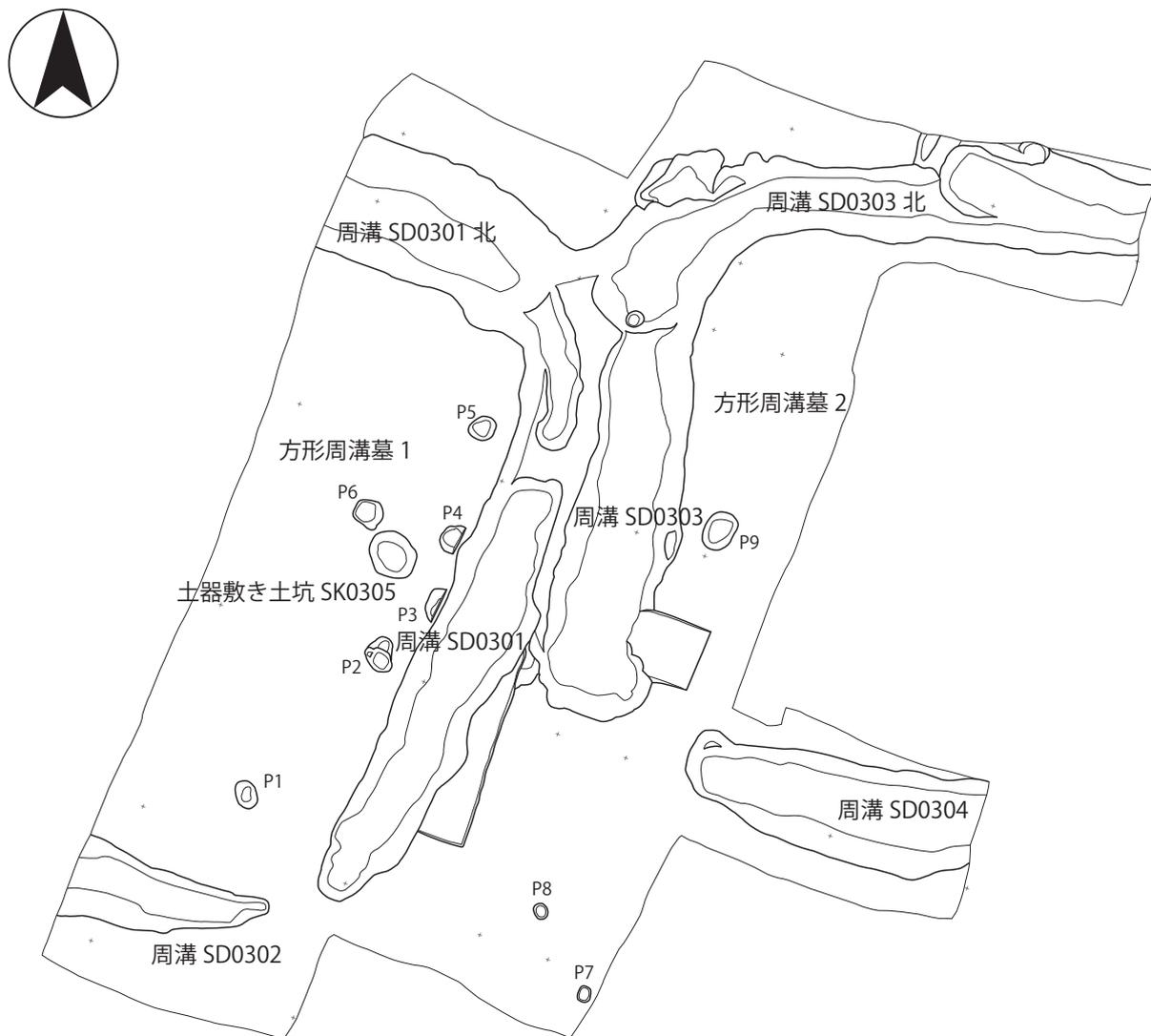
方形周溝墓 SX0306 溝 SD0301 と SD0302 に区画される方形周溝墓です。全体の東側ほぼ半分を検出しました。南北の内法で 8.8 m を測ります。盛土部は完全に削平され, 埋葬主体等は残っていません。内辺の肩は直線的で, 南東隅において SD0301 と SD0302 間は切れており陸橋状となっています。SD0301 北辺の最大幅は 1.5 m, 最大深さは 0.5 m です。東辺は最大幅 1.3 m, 最大深さ 0.4 m を測ります。SD0302 は最大幅 1.2 m, 最大深さ 0.4 m です。埋土は黒ボクに近い黒色シルトで, 周溝墓 SX0307 の周溝 SD0303 を切っておりこちらが新しく築造されたものです。SD0301 北辺の中央部からは床面から浮いた状態で弥生土器細頸壺が出土しました。東辺中央部からも, 床面から浮いた状態で, 弥生土器壺・鉢片および花崗岩の台石を含む礫群が出土しています。出土した土器から弥生時代中期後葉の築造です。

方形周溝墓 SX0307 こちらは西半のみを検出しました。溝 SD0303 と SD0304 に区画される方形周溝墓です。一部調査区を拡張して追いましたが東辺部分は調査対象地区外に及ぶようです。南北の内法で 7.4 m を

測ります。周溝墓 SX0306 同様に盛土部は完全に削平され、埋葬主体等はありません。SX0306 に比べコーナー部などは丸みを持っています。南西隅の SD0303 と SD0304 間は切れており、陸橋部となっています。SD0303 北辺の最大幅は 1.8 m、最大深さは 0.55 m、西辺は最大幅 1.2 m、最大深さ 0.4 m を測ります。SD0304 は最大幅 1.4 m、最大深さ 0.4 m です。埋土は周溝墓 SX0306 と比較するとかなり茶味かった黒色シルトです。SD0303 北辺の中央部から、床面から浮いた状態で風化して細片となった弥生土器甕が出土し、別に床面に正位で置かれた状態の台付細頸壺が出土しています。また、北西コーナー部からも床面から浮いた状態で細頸壺が出土しています。周溝墓 SX0307 に先行はするものの同様に弥生時代中期後半の築造です。

4 まとめ

調査の結果、縄文時代中期末頃の土坑・ピットを検出しました。東方 50 m の地点で実施された第 2 回の調査においても、同様に縄文時代のピットが検出されており、一帯に縄文時代の集落が存在したとみられます。鈴鹿市内では中期の後葉から末にかけて急激に遺跡の数が増加します。東庄内町東庄内 B 遺跡・国府町

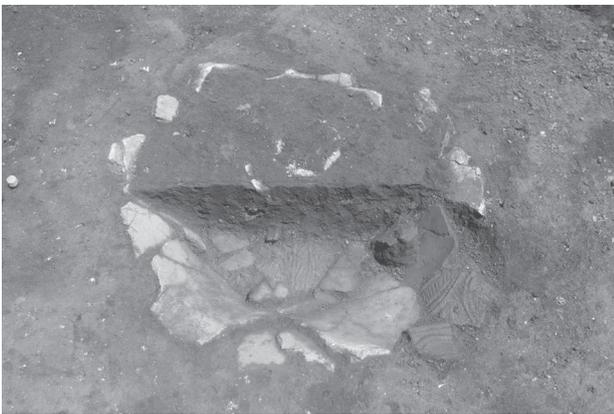


岡田南遺跡遺構配置図 (1 : 100)

北一色遺跡・安塚町起 A 遺跡・郡山町西川遺跡など主要な遺跡がその例です。岡田南遺跡もその一つといえるでしょう。

今回の調査で、特に注目されるのは土器敷き土坑に使用されていた土器のうち 1 点で、その複雑に入り組んだ模様から唐草文系と呼ばれている土器です。本来は長野県の諏訪湖周辺や伊那谷を中心として分布する土器で、中でも南伊那のものに近いようです。そして、これらの土器に詳しい研究者によると土器の胎土や焼成は伊那のものとは異なるとのことで、何かの偶然で土器が運ばれて来たのではなく、そちらで土器作りを身に着けた人物が鈴鹿まで移住していた可能性を示すものです。縄文時代中期末ごろの遺跡数の増加の背景にはこのような広域にわたる人々の動きがあったといえそうです。

今回の調査では弥生時代中期後葉の方形周溝墓 2 基が見つかりました。第 2 次調査においても、方形周溝墓の周溝とみられる平行する溝がいくつか見つかったことから、調査地一帯には、弥生時代中期後葉頃方形周溝墓がそれぞれの周溝を共有するように密集して、帯状に連なる墓域を形成していたことがうかがえます。墓域の広がりから、そのもととなる集落がそれなりの規模を持つことが予想されますが、今のところ住居跡の情報はつかめていません。同じ中位段丘面に位置するのか、岡田遺跡の低位段丘面に立地するのか、さらに低い谷底平野面に所在したのか興味深いところです。究明は今後の調査に期待したいと思います。



土器敷き土坑 SK0305 (南から)



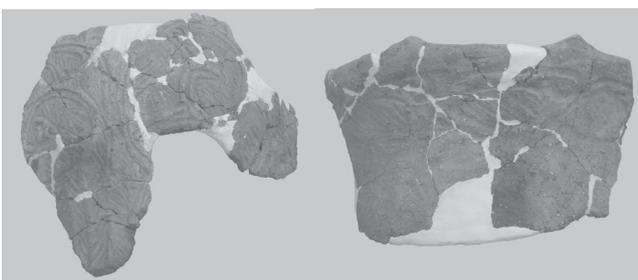
ピット p-2 (南から)



方形周溝墓 SX0306 (北から)



方形周溝墓 SX0307 (西から)



縄文土器



弥生土器